アルヴァックスの階級論について

小　関　藤　一　郎

I

デュルケームの社会学には階級についての考察がないとはしばしば指摘されるところである[1]。これはマルクス主義の立場をとる人からばかりなされているものではない。たしかにデュルケームの社会的現実分析の中には，社会的対立の面の考察はほとんど問題にされていないし，階級ということも分析的考察の対象とはなっていない。その意味でこの指摘は正しいといえる。しかし，近代的社会の秩序の成立を合理的な基礎におこうとしたデュルケームにおいて階級の問題は全然触れられていなかったのではない。彼の「社会分業論」の第三部（Livre Ⅲ）には分業の病理的形態として階級斗争の問題がとりあげられている。そこでデュルケームは労資の階級対立の激化の傾向に注目して，それが大規模工業の発達とともに尖鋭化している事実を問題視しているのである。そしてそうした事態を生ぜしめる原因について考察を進めて，各人の適性と社会的機能の配分が正しく対応していない事実に注意をむけ，この不一致が強制によってしか解決されていないところに根本的原因を認めているのである[2]。デュルケームにおいては，だから，階級斗争を分業の必然的帰結とみることは誤りであるとされている。社会的分業が社会の成員個々人の適性や能力に応じて行われていれば，階級斗争はおこらなくなるはずである。そうした望ましい状態が出現するためには，社会の成員間に平等，機会の均等が保障されなければならないという正義観が一般に広まるとともに，社会的機能相互間に自主的な規制が徹底して確立することが必要であるとされるのである[3]。このようにデュルケームは階級斗争を社会的分業の正常ではない形態としてとりあげだけで，階級そのものを社会構造の中においてどのように位置づけるかという分析にまでは進まなかった。それ故，階級が社会的機能の配分とどのように関連するかという根本的問題には全くふれられることがなかったのである。階級斗争を病理的現象または異常的形態としてみていく立場からは，階級現象の分析はでてこないのであろう。しかしデュルケーム学派のすべての学者，研究者がみなそうであったのではない。経済社会学者フランソワ・シミアン François Simiand や社会形態学や記憶の研究にもすぐれた業績をのこしたモーリス・アルヴァックス Maurice Halbwachs は階級に対して注目し，すぐれた研究をのこしている。とくに後者アルヴァックス Halbwachs においては階級研究は極めて注目すべきものをもっている。

Halbwachs はマルセル・モース Marcel Mauss とともにデュルケームの後継者としてその社会学主義 Sociologisme の発展にもっとも貢献した学者であるが，師の学説をよく消化し摂取した[5]ばかりでなく，現実に対する鋭敏な感覚をもって師デュルケームによって開かれた途をさらに深めるとともに，デュルケーム学派の理論のもつ多産性を今まで考えられなかった領域にまで研究をひろげることによって実証したのである。そうした点に Halbwachs の研究の独創性が認られるのである[6]。Halbwachs の研究は自殺[7]，社会形態学[8]，記憶[9]の諸領域にわたっているが，以下ここで扱う階級もそれらとならんで彼がすぐれた業績をのこした領域であり，この面における研究は彼の活動ももっとも大きな部分をしめているともいえる。そればかりでなく，上述したように Halbwachs の階級研究はデュルケーム学派における代表的なものともみられるばかりでなく，その研究の含意は非常に大きく，今日のフランス社会学における各種の研究にも影響を与えている点でも注

目されるのである。なお Halbwachs はフランスにおける社会心理学研究の開拓者でもあって，ストラスブール大学やパリ大学の教授職を経てコレージュ・ド・フランス Collège de France にむかえられ，社会心理学の研究を依嘱されたが，間もなくドイツ占領軍の命に従わなかったとの理由でゲシュタポの手によって逮捕され，1945年2月 Buchenwald のキャンプで悲惨な最後をとげたのである（1877—1945）。当時相当の高齢であったとはいえ，多くの期待をよせられながら，暴虐の手にたおれたことはまことに残念なことである。彼の階級研究についての著作は以下に示すとおりであるが，労働者階級に関する研究の古典であるA1は今日非常に入手が難しい稀刊書となっいる。

I 著　書

A1. la classe ouvvière et les niveaux vie, 1912

A2. Les cadres sociaux de la mémoire. (chap.7—Les classes sociales et leurs tradit:ons.), 1925.

A3. L'évolution des besoins dans les classes ouvvières, 1933

A4. Les classes sociales, 1937

A5. Esquisse d'une psychologie des classes sociales. 1955

II 論　文

B1. Remargues sur la position du problème sociologique des classes (Revue de Métaphysique et de Morale, 1905)

B2. Matière et société (Revue philosophique, 1920)

B3. Les caractéristiques des classes moyennes in Inventaives III (Les classes moyennes.) édit., par C, Bouglé, 1939)

註 1) K. Wolff, Emile Durkheim におさめられた論文などがその代表である。

2) De la division du travail, 7e édit, 1960. P.345.

3) idid., P.

5) Halbwachs の Durkheim についての紹介に次のようなすぐれたものがある。 "La doctrime d' E, Durkheim", Revue philosophique LX XXV (1918) pp. 353—411., Les origines du sentiment religieux d'aprés Durkheim(1925) がある。

6) この点についてフリードマンも指摘している。 G. Friedmann, Avant Propos in "Esquisse d'une Psychologie des classes sociales, 1955, p. 14.

7) Les causes du suicide, 1930.

8) Morphologie sociale (nouvel. édit,) 1946.

9) Les cadres sociaux be la mémoire, 1925.

10) Mémoire collective, 1949.

II

Halbwachs の階級考察は上の著作表からもわかるようにに労働者階級が出発点であるが，それと並行して中産階級 classes moyennes 研究がまた注目に値する。中産階級について主として論じられているのは B.3 であるが，A.4, A.5, や B.2 にも若干ふれられている。 中産階級に関するものは全体として分量としては余り多くはならないが，注目すべき考察が含められている。さて，Halbwachs の階級考察の特徴を明らかにするに当って，第一に階級一般についての定義がどのようになされているかを見ることからはじめていこう。Halbwachs の階級に関する著作の一番はじめのものは B.1 である。それは19世紀末から20世紀始にかけてドイツの経済学者たち，とくにシュモラー(G, Schmoller.), ビュッヒャー(K. Bücher, ゾンバルト W. Sombart などの行った階級研究に対する批判的研究である。こうして，Halbwachs の階級研究はそれらドイツ経済学者たちの研究に対する批判からはじまっている。彼はドイツの経済学者たちが階級区分の基準を職業とか財産あるいは経済的機能といった客観的なものに求める見方に反対する。そして，階級についての社会学的説明のためには，そうした客観的基準だけでは充分ではないうのである[1)]。

何故なら，Halbwachsによると，社会学者にとって重要なことは客観的な社会関係ではなく，社会意識の状態である[2)] からである。したがって，階級を考察する場合，「根本的に階級が自らについて意識をもたずに存在すると想定することは矛盾したこと[3)]」になるのである。 だから階級現象の基本的特徴としてその意識の存在が第一にあげられるのである。そこに社会学の対象を集団表象 représentations collectives としたデュルケームの考え方の影響がはっきりと着取されるのである。ところで，この社会意識は一定の時代の経済状態

の単なる反映というものなのではない。むしろそれは独自性をもつものなのである。だから，社会意識の動く方向は現実の発展する方向と一致するものなのではないのである[4]。Halbwachs によると，この意識面を無視することは，社会現象のいきた全体性あるいは具体性を把握するためにも，許されないことなのである[5]。Halbwachs は Bücher の財産基準説を批判して次のようにいう。

Bücher によると階級という現実の観念の根底には財産という一般的事実があるとされる。たしかに，財産を基準にして人々を分類することはできる。しかし，階級の説明にはそれだけでは充分ではないのである。何故ならば，財産は人々が獲得する量である限り，一つの抽象でしかないからである」[6]。ところが，階級の観念は人々の意識において生きた具体的，全く人間的なものであって，単に一連の数字だけに還えされることはできないものなのである[7]。また，階級ということを語るとき，すぐ知覚されるのは所得というような量的区別だけではなく，質的な生活の様式 façons de vivre の差といったものである[8]。こうした理由によって，階級を客観的基準だけによって説明することは不充分であるとされるのである。第二に Halbwachs は階級の存在は体統的社会（Société hiérarchisée）においてのみ可能であるという[9]。階級はそうした社会においてどのような層位（niveau）に自らを位置づけるのか，またこの層位は何によって，どのような特権や権利，あるいはどんな利益によって規定されるのか，さらには体統的構造全体は何によって決定されるのかなどということを自らに表象するのであるが，上述の階級意識とは具体的にはこうした意識活動を意味するものなのである。このようにして，Halbwachs は階級意識のつぎに体統的関係を階級の重要な特徴とみるのである。だから，Halbwachs が「結局社会階級は，人々が相互に相手方に対して示す一種の敬意によって区別される人々を含む[10]」のであるという時，そこに人々が体統的関係におかれていることを意識していることを意味しているのである。そしてこの体統的関係についての意識は社会全体に源泉をもつ集団的価値判断に基づいているのである。Halbwachs はこの点について次のようにのべている。「すべての階級意識は二つの価値判断を含んでいる。その一つは当該社会においてもっとも重要であり，かつまたもっとも重視される財についての評価で，もう一つは階級の成員がこれらの財に対する要求をどの程度充足することを可能ならしめられているかについての判断である[11]。」つまり階級の体統的関係は，Gurvitch がいうように，社会が階級に対して抱く集団的意見と各階級が全体の中においてしめる位置について抱く集団的意見の両者に由来するものなのである[12]。そしてこの体統的関係は具体的には，Halbwachs が階級の存在と機能遂行にとって決定的であるとみる二つの領域において表現されているのである。その一つは社会においてもっともすぐれた活動，すなわち理想を具現化している活動に対する階級の参与の度合いであり，もう一つは階級に特有な「要求水準」niveau des besoins である。前者は経済学者が試みた階級区分の基準の一つである職業あるいは社会的機能ということに関係をもってくるのである。すなわち，職業とか社会的機能が上下的に評価される基準をなすものがこの「理想を具現化した活動」なのである。

Halbwachs はそれを別のところでは「考えられる限りもっとも充実した社会生活 la vie sociale la plus intense」といっているものであるが，それは T. Parsons が社会階層の説明において「社会の共通の価値体系の標準からみた，社会体系の単位の順位付けである[14]」とのべているところを想起せしめるもので，中心的価値が評価の基本に存在していることを含意しているものといえる。

Halbwachs はこの点をそれ以上は発展させていないが，この含意はたしかに注目されてよい。次にもう一つは富とか所得など「要求水基」に関するものであるが，この両者の間には単に平行関係が存在するわけなのではない。両者の間に具体的にどのような関係が存在するかは結局階級研究の中心的課題である。Halbwachs はこのように階級区分はこの二つの領域にはっきり表われるのであるとみるのである[15]。ただこの区別の根底には，社会生活の理想的とみられるものがあるという含意があり，それに接近したり，あるいはそれから離れる程度にしたがって階級の社会的地位は異るものであることが強調されているのである[16]。そして階級の地位が高くなるほど，階級はより多く統

合されるようになるとともに社会関係の網の目の中に緊密にくみこまれるようになるのである[17]。上述したように，Halbwachsにおいては社会の中心的理想への接近の度合いが階級の位置づけを決定するのに重要な要因となるのであるが，それと「要求水準」との関係はどうなっているのであろうか。これについて，Halbwachsは階級のもっとも本質的な決定的要因を経験的，実証的研究にはもっとも接近し易い生活水準の領域に求めたのである。もっとも Halbwachs ははじめ主として労働者階級についての研究をその生活水準に関する資料を通じて行ったのであるが，人々の特に労働者の要求水準を重視すべき理由は次のようであるといえる。物的要求の満足は労働者家族の生計費，あるいは家計によって充足さることができるし，また，労働者の社会的（非物質的）要求もまた固有の意味における物的要求に反映されると考えることができる[18]。この見地に立って，マルクス主義者が生産の役割を重視したのとは反対に「消費傾向」tendances consommatrices を重視することが必要なのである。「労働者の階級意識の統一は特に複雑な社会生活における彼等の機能によって説明されるように思われた。しかし，階級という社会的区分がそこに起源をもつものだとしても，この区分が顕在化し，はっきりするのは別のところにおいてであって，それは生産する社会ではなく，消費する社会においてである。実際，階級の区分は人々が工場や鉱山の職場において労働している時に，もっとも顕著となるのではない。……工場の生産だけについてみれば，機能の体統的関係は事物の本質に根ざした非人格的なものとして現れる。それは人格的ではなく「客観的であり，また技術的なものであって，社会的なものではない」[19]。さらにまた「われわれは労働者の階級感情を彼等の機能と結びつけて考察してきた。彼等の機能は定期的に彼等をして社会の外に出ることを余儀なくせしめることがあるのだ。それは労働者には，彼等が日常生活体験をしている共同生活と比べてみると，その職務の生活が苦痛な，しかも異常なものと思われることがおこるからである。この意味において，階級区分の真の原理が求められるべきは生産の世界においてではなく，消費の生活の領域においてなのである」[20]。何故なら，工場には外部の影響がはいりこんできているのだが消費生活には外部の影響は介入しない。そのため消費生活にこそ真の階級区別が現れてくるのである[21]。社会は生産という目的のためにだけ，組織されているのではなく，一部の人々は生産に参加しながらも，労働者のように物質との接触に全努力を傾倒し，ために社会から離れるという犠牲を払うこともなく，種々生産の成果をより多く享受できる人がある。労働者はそうした人々を社会的に優越した人々と見るようになる[22]。こうして，労働者はただ生産の面において生活するだけならば，その職務組織やその体統的関係を客観的に見られるかもしれないが，現実には労働者も消費生活をするし，消費生活と生産生活を交互に経験することによって，その労働の中においても自らの劣勢的地位を感じるようになる[23]。このような苦痛な労働にたえていくため，労働者の消費生活すなわちその生計費支出には労働者に特有な特徴が現れてくるようになるのである。もちろん，労働条件と消費慣習の間の関係，その間の作用反作用の交流は一見して考えられるよりははるかに複雑なものがあることを[24] Halbwachs は認めている。しかし，労働者のおかれている生産および生活上の種々の条件が彼等の生活意識にいろいろ影響を及ぼしており，その道徳的結果がどうなるかははっきりしないが，彼等の慣習，意識の特性はその消費生活に表現を見出しているとみられる[25]のである。こうした点から消費生活が階級の特徴を明示的に表わす有力な手がかりとなるのである。

註 1) B. 1. p. 891
2) B. 1. p. 892
3) A. 1. p. 2
4) B. 1. p. 892
5) B. 1. p. 893
6) B. 1. p. 893
7) B. 1. p. 894
8) B. 1. p. 897
9) A. 1. p. Ⅱ
10) A. 2. p. 286
11) A. 1. p. Ⅱ
12) Gurvitch, Etudes sur les classes sociales, 1967. p. 167

14) T. Parsons "Essays in Sociological Theory" p. 388
15) A. 1. p. Ⅲ
16) A. 1. p. Ⅲ
17) A. 1. p. Ⅳ
18) A. 1.

19) A. 1. p. 125—126
20) A. 1. p. 127
21) A. 1. p. 127
22) A. 1. p. 128
23) A. 1. p. 128
24) A. 1. p. 133
25) A. 1. p. 134

Ⅲ

Halbwachsの階級一般についての特徴は上述のとおりである。ところで彼は階級をいくつあると見たのであろうか。A.5.によると，階級はまず農民階級[1]，労働者階級，事務員 employés や公務員 fonctionnaires などの中産階級，および企業者群を含むブルジョワジーがあげられている。農民階級というのは，農民全体をさすもので，労働者など都市生活者に比べると，農民はその間に収入などかなりの相違を含んではいるが，相当強い同質性の存在がみられることから一つの階級をなすものとされている[2]。しかしHalbwachsは農民階級については特別にまとまった研究を行ってはいない。彼がもっとも力を注いだのは何といっても，労働者階級についての実証的調査にもとづく研究である。それはA.1およびA.3の内容をなすものであるとともに，B.2 などにおいても更に発展されている。そこで，ここでは特にその特徴を明かにすることに重点をおくことにする。ただもう一つ注目すべき点は彼の中産階級に関する研究である。これは B.3において中心的題目となっているが，労働者の生活との比較として上述のA.1やA.3においても言及されている。結局Halbwachs の中産階級に関する著作はこのB.3だけであるが，その含意するところは大きいし，また最近のフランスの中産階級研究論書によっても先駆的な試みとして指摘されており，そのもつ意義も大きいと考えられるので，最後に中産階級論についても言及していくこととしたい。

Halbwachsの労働者階級研究は彼の階級研究の中心をなしている。上述したようにその特徴は労働者の生計費についての資料調査によってその生活水準を研究し，それから，労働者階級の特徴を明かにしたものである。そこにはデュルケーム学派の実証的研究の方針が踏襲されているばかりでなく，ル・プレー学派の家計調査による方法を摂取して，フランス社会学派の研究に大きな発展をもたらしている。と同時に労働者階級の意識や態度がこの生計費調査を通じて極めて明白に描き出されているのである。さて，Halbwachsによると労働者とは第一に自分の腕によって工業生産に従事する人間 (l'homme qui travaille de ses bras à la production industrielle) であると定義されている[3]。まず労働者はこのように工業生産に従事することによって他の階級と区別される。もちろん，そのことは労働者自身が抽象的にそうした存在として自らを表象していることが明かであるということを意味するのではないし，労働者が現実に自らの職務についてもつ観念の前面にでているものが，彼の従事している具体的活動であるかあるいは彼の従事する産業であるかは明白ではない。ついで，Halbwachsは労働者であるうことにとって重要なことは，彼が他の人に雇われて機械的仕事に従うかあるいはその他肉体的労働を提供しているというであるといい，雇用 employéされていることを重要な特性であるとみる。それで雇用されて労働するものであれば，徒弟として訓練をうけている期間中のものでないものは，他の肉体的労務に従う人に対する全く補助的な作業に従うものであっても，労働者と見なされるのである[4]。そうした労働者が同一職務 métier に従事して集まる場合，相互に，一定の組織をつくることがあるが[5]，そうした組織の結成は労働者たちが彼等の利益または利益であると信ずるところのものを擁護するためになされるのであって，そのことは彼等がその他の点についても彼等に特有な集団意識 conscience collective を発展させていると見ることを許すものではないのである[6]。何故ならば，Halbwachsによると，職務 métier という概念は種々の活動の全体を意味するものであるから多様性をもっていると同時に限定された意味をもっている。それ故に，職務が同一または類似ということはそれに従事する人々の間に集団意識を成立せしめるための充分な条件ではないのである[7]。それでは産業が同一または類似であることがその必要な条件になるのであろうか。Halbwachsによるとそれも必要な条件にはなるが充分な条件ではないのである[8]。産業は人間が加工する物質または材料によって定義されるものである[9]。だか

ら産業によって労働者の取り扱う物質もいろいろ異っている。それでこの扱う物質や材料の相違によってそれを処理するための技術的適性が異ってくるばかりでなく，人間と自然の関係についての思考，感情の慣習や表象も，かなり異ったものが労働者の中に発達するようにも思われる。そしてまた，そうした思考，感情の慣習や表象の相違は労働者に，彼等の職能を同じものであるとする意識を生ぜしめないのではないかと考えられる[10]。しかし，産業別に労働者を区別することは技術的な基礎によるものにほかならないから，彼等の階級意識を説明することはできないのである[11]。というのは社会階級という存在は体統的関係において考えられるのであるが，技術的区別はそうした上下的なものではないからである[12]。なるほど，産業の中に含まれている多くの職能の間には，技術の熟練度（skill）や値価に多くの差が存在しており，それはある点からは社会の中の立体的な区別を決定するものであるかのように思われることもある。しかし，それは全く明白な事実であるわけではない[13]。一部の人々は，ある一部の国民社会において現実に生じたように，産業を上下的に区分することができると考え，たとえば，産業の効用の大小，困難度の大小，労働者に対する好意的反応をおこす度合の多小などにしたがって分類できると考える。そしてそれらの人々はさらにこれらの産業の区別はそれらの産業のそれぞれに従事する労働者の集団意識が表明する区別と一致すると考えている[14]。しかし，果してそうした区別はそれだけによって，労働者の価値意識と同一とみられる道徳的評価あるいは社会評価と結びつくのであろうか[15]。Halbwachsはこのようにみると産業の区別がこうした労働者の価値観—それこそが彼等の階級意識の中核をなすものである——と合致することは極めて稀であると考える。むしろ，実際は，その間に多くの不一致が存在するのが常であると指摘される[16]。社会主義体制において，集団的な賃金の決定は職務の重要性，あるいはその困難度を比較せしめるようになることは考えられるが，そのことは労働者の抱くであろう傾向や意見をそれらが決定するこるを意味することにはならない。いずれにせよ，Halbwachsにおいては産業の分類の要求はかりにそれが生じたとしても，人々の価値判断を決定するにいたるほど強いものとは見られていない[17]。したがって産業による分類は労働者の意識の現実に答えているものではないのである。だから，労働者の現実を見るためには産業別にみることは重要なことではなくなるのである。むしろ重要なことは，労働者の産業に関する表象の中で彼等の社会的生活水準を表現する表象を，特に区別してみることなのである。労働者の生活が他の階級の人々と根本的に異っている点はどこにあるのであろうか。それをもう一度はっきりさせて見ることが必要である。Halbwachsは A．1においてもまたその後再びこの問題をとりあげ更に詳述した B．2——これは Bergson の物質と記憶 Matière et Mémoire と対比して物質と社会 Matière et sociéré と題されていることに注意しなければならない——においてもこれを追求している。「労働者は，他の人々とは別に，また他の人々と離れて物質 matière inanimée に対して直接労働を加える仕事を担当する唯一の存在である。そのため彼等は何よりも物質と日常的に接触する立場におかれている[18]」とか「人間の社会は物質を獲得し，それを社会の目的の目的に従って加工するため，一群の人々をこの機能のために配置する。彼等はこの機能を果たすために事物と接触し，事物に面して人々から孤立し，他の人間集団から分離するようになることを余儀なくされる[19]」と Halbwachs はのべているが，労働者が社会の課する物の生産という任務遂行のため，たえず物質と接触する労働に終始し，その労働のため人間との交渉，接触を断たれている点が労働者の生産生活の特徴とされるのである。そればかりでなく，労働者はその仕事を行うに当って上の人々から命令や訓令をうけるだけで，しかもその相手とするところは人間ではなく物質であるためどの面からも社会の中に組みいれられていない（ne sont pas encadrés dans la société）のである[20]。これに対して「そうした全く命令を果すため物質とだけ取りくまなければならない労働者というのはごく一部の，しかも全く適性を考慮されずに仕事につかされている労働者だけのことで，他の労働者には妥当しない。とくに労働者は技能の向上とともに適性にしたがって職場に配置されていることが多く，従来と同じ量の労働で極めて

高い能率をあげていることも産業によっては少なからず見られる。しかもこれらすぐれた労働者 bons ouvriers はその個人的特性を発揮することに注意をむけたり，あるいは，技術などについての知識を増大せしめ科学に対する理解も深めているから，仕事，職務に対する関心や興味も多くもつようになっている。そうしたことからこれらの労働者は従来の機械に支配される労働者に比べて社会に志向することも大きいのではないか」[21]という反論がある。Halbwachsはこの反論に対してそうした事実の存在は認めている。仕事に満足を見出し，能力に応じた作業を行っているため，社会的地位の低さを問題にしない労働者のあることは事実であるが[22]しかし能力に適した作業に従事し仕事に満足していても，それだけで，労働者が社会との接触を根本的にとり戻しているとはいえないのではないか。bons ouvriersでもやはり社会から隔離されていることには変りはない。労働者の技能の向上は人間の物に対する力を大きくしていることは否定できないが，それは人間に対して向けられてはいない。今日の社会において高く評価される能力は集団の成員間の結合を強化し，成員相互の接触点を増大せしめるものであるが，労働者の技能，能力の向上はそうした方向のものではない[23]。その意味において，「労働者の力が社会の方向に潜在的には向っているかもしれないがそれは顕在化していない。それが顕在化するには労働者の職務という鎖から脱出するのに成功することが必要である[24]」とされるのである。こうして労働者の職務はその能力がいかに向上しても技術や科学的職務とは根本的に区別されているのである。Halbwachsはこのような労働者の生産——物質とのみの日常的接触という経験からなり立つ——生活からその心理の特徴を次のように示すのである[25]。

1.　孤立的状態においてよくみられる非常に厳しい気質。

2.　その思考活動は緩慢な動きを見せながら同時に明白確化することはない。しかも感受性がきわめて鈍い。

3.　日常生活において一般にはっきりした関心をもたず，最大の努力，注意は仕事に精を出すことに消費しつくされているため，社会の中から外に出る傾向をもつ。（一般の社会生活の仲間いりができないという意味）

4.　仲間との連帯性は強いが，一般社会との社交的な交渉は全くもとうとしない。

しかしこうした労働者の心理的特性は直ぐそのまま労働者の階級意識である社会意識をつくり出すのではない。労働者のそうした階級意識が生れるためには，労働者が彼等の集団的状況を他の集団のそれと比較することがなされなければならない[26]。そうした比較が社会的な条件においてなされるのはごく最近にいたって(20世紀のはじめ頃)ようやく可能となったのである[27]。それは一つには大工業の発達にともなって，賃金生活者 salarié としての労働者の数が著しく増大したことと，もう一つは社会全体が極めて複雑化してきたことによって可能となったのである。こうした見地に基いて Halbwachs は労働者階級の生計費調査を行うことによって，彼等の欲求水準あるいは消費的慣習がどのようになっているかを明らかにしようとした。このため彼が用いた資料はドイツにおける家計費調査に関する統計資料である。それは短期間のものではなくかなり長期間に亘るものであった。そうした統計資料を科学的に分析して得られた結果は大要次のようである。Halbwachsはこの調査行うに当ってエンゲルの法則を出発点として，それがどの程度まで労働者の日常の経験において験証されるかを明かにすることに努めたのであるがエンゲルの法則の第一として知られるする「食費が生計費の中にしめる比率は，所得の増大にしたがって減少する，ただその絶対額は増大する」についてははっきりそれを確認できる結果を得たとのべている[28]。ただ，Halbwachsは労働者の生活においてはある程度の所得の増大までは食費はそれと並行して増大するが，それは食料の質の向上によるものであることを指摘していることを注意しておかなければならない[29]。エンゲルの法則の第一は確認されたが，第二の法則「被服費のしめる割合は所得の増減にかかわらず大体において同一である」については，エンゲルの主張と異って，所得の増大に比例して全般的に増加することが立証されるという[30]。被服費のしめる比率の変化の程度は食費や住居費あるいはその他の費用（文化的支出等）ほどではないが，とにかく同一であることはないのである[31]。第三の住居，光熱費

のしめる比率についてもエンゲルはあらゆる所得階級について，大体同一であるとしているが，Halbwachs は次のような新しい結果を得たという。家族員の増大している場合においては住居費の絶対額は減少の傾向を示すばかりでなく，その比率も食費と同様の傾向を示して減少している。家族員が少いときは，住居費のしめる比率は多少増大の傾向を示している。ただ家族員の多い場合ある一定の所得水準までは同一水準にとどまる傾向がある（ただし家族員が余り著しく増加しない限り）という[32]。第四のその他の文化費などの支出のしめる比率は所得の増大に比例て増加するははっきりそのとおり確認されている[33]。こうして大まかにいって，所得の増大は生物として生存維持に直接必要な欲求以上要求つまり社会的性格の顕著な要求をより多く充足させることを可能ならしめているが，それはごく一般的にいえることだけであって，それだけでは消費者としての労働者の現実の傾向はつかむことはできないのである[34]。真に労働者の消費生活の傾向を知るためには家計費支出の状況と家族の規模との関係や労働の職種別の状況などを見なければならない。しかしそうした各種の要因との関係において見ても，労働者の消費生活の真の特徴をみるには，エンゲルの法則のような分類の仕方によって観察していくだけでは不充分である[35]。労働者階級は，上述したように，彼等の機能遂行に努力する間は，他の人間との関係や社会環境から孤立化される特徴をもっている。そのため彼等は労働と本来の意味での社会生活との間の境界がはっきり区切られることを欲するのである[36]。しかし実際はなかなそうはいかないのである。このため，一日中その最良の努力を苦痛な仕事，本来他の人間との関係にたいしてもちたい関心以外のことにむけなければならないため，その結果として肉体的疲労，精神的困憊，社交的欲求をみたす財に対する関心の欠除などが生じてくる。そうした結果は労働者の消費生活にいろいろの影響を及ぼすのである。その程度は条件によって一様ではないが，それが労働者の社会生活に及ぼす影響は非常に強力である，こうした見地からみると，労働者の消費生活を欲求の体統という見地からみることに大きな意義が生じてくるのである[37]。そこで Halbwachs は欲求を物的，原始的 primitifs なもの一（肉体的生命の維持，再生に不可欠なもの）一と社会的なもの（集団生活を行っている人間としての，また社会の成員として社会から引き出すことのできる利益を増大せしめることを目的としたもの）とにわけることが合理的であるとし，前者は主として食費をさし，後者は一般に文化的といわれるその他の費用をさすこととする。そして被服費と住居費はこの中間に位するものとみるのである[38]。

ここからHalbwachsは要求についての社会学理論を発展させていくのである。すなわち，彼は現在提示されている問題というのは今日の社会における要求の本質的意味，その発展ということで，この問題についての説明を行うことが課せられた仕事となるのである。Halbwachsは要求充足に関する限界効用理論などの個人主義的理論を排して「人間はたんに一時的に瞬間の欲望に従うべきではなく，むしろ来るべき欲望を抑制する必要を理解し，現在の欲望の各々をどの程度充足さすべきかを決定するために，その属する集団の他の成員の行う行為を見て学びとっているのだ，とすると要求を四つの部類にわかつことが必要であり，しかもこの区別の原理が社会的なものにほかならないことが理解される」[39]という。こうして食，衣，住，その他の要求の間に補完関係が生ずるほど，密接な関係が生じてくるのである。だから，たとえば労働者がアルコールを多く摂取するのは，部屋の設備がよくないこと，被服がボロであるため寒さにふるえていることによるのである[40]。だから，要求充足のための支出の形態（頻度）に社会の影響ははっきり現われるのである。すなわち，労働者の生活費において，被服と住居費は非常きりつめられるが，食費はかなり変化し，最低にきりつめる場合と最大に支出する場合とでかなり差がある[41]。これは労働者たちが，社会生活上仲間の人々が充足させるのと同程度要求を充足させるよう計算していかなければならないため，毎日毎日の支出と一定の間隔をおいて行なう支出とを区別し，後者をきちんと最低限にきめるからである[42]。また労働者は他の彼より上流の階級の人々に比べて肉体的要求充足のために多く支出する傾向があり，住居費，被服費には余り支出をしない殊に住居費に対して彼等はそれを税金のように

考えている。しかるに他方労働者は住宅が狭隔で快適でないため，その補いを仲間と酒場などでの交際によって求めている。このため交際費にかなり多く支出しているのである。労働者には貴族や上流社会の人々の豪華な住宅や立派な家具調度をととのえた部屋などは全く無縁なのである。これらの支出はところで労働者においても，また他の階級においても，一つの全体となってその間に一定の調和を保っている。だから食糧は食物としてでなく労働者の生活全体の中において一定の位置をしめている。人々は「だから生活の要求充足において一つの快（plaisir）を求めるのではなく，調和を保った快の全体を求めるのであり，われわれの選好は一定の集団の全員に共通である。そして快の全体というのは成員の社会的経験—それは成員個々人を越えたものであるが—を表明するのである[43]。

そこで労働者の生活要求の充足の全体の関連を見ることによって，はじめてその特徴をつかむことができるのである。たとえば食糧についてみても，労働者にとっては何よりも食事が一番のたのしみであるばかりでなく，また一番重要な位置をしめるものである[44]。だから食事はたんにその物的面ではなく，社会的側面が重視されなければならない。食事は労働者にとっては正しく仕事の苦悩から解放されて，社会に復帰するための機会であり，またそのための最上の方法なのである[45]。そして一定水準の食事をとることは労働者の家族に社会との結びつきの感情を維持させることにもなるのである[46]。これに反して住居は大都市に住む大部分の労働者にとってはその要求を充足するためのものではない。彼等の住宅は一般に劣悪な状態にあるが，これは家賃が高く，都市への労働者の流入増大がそこに一層拍車をかけていることはよって一層ひどくなっている。このため労働者は住宅でくつろぎ，自由を享受することができないことが多い。労働者にとっては住宅よりは街頭の方がむしろ自由をより多く味える場所である。だから仕事が終ってから自宅へ戻ることがおそくなることが多いのである[47]。もちろん労働者も所得がますにしたがって，家賃に多額を支出する傾向は見られるが，しかし家賃に廻わすことのできる部分には限界がある。このため労働者は酒場など，家族外での消費にかなりの費用をつかっている。それは気ばらしかあるいは仲間とのつき合いのためであるが[48]，そのため，労働者は住居に対する要求を発達させなくなるのである[50]。そして労働者がその低い所得にもかかわらず，そうした家庭外での消費に比較的多くの金を使っていることはまた彼等の労働生活が物との接触に終始していて，社会的接触がほとんどないことから生ずるのである。しかも大規模工業の発展と大都市の著しい膨脹はそうした労働者の生活をもたらすのである。Halbwachsはこのように労働者の生活をその生計費資料の面から観察しながらも，労働者が生産過程において物質との接触だけに限られて社会と隔離されている生活によって大きな衝撃をうけていることを明かにしている。労働者の生活についてのその叙述は客観的でありながら，しかも人間疎外 aliénationというような表現こそ用いていないが，鋭い分析によってきわめて強く胸をうつものをもっている。

註 1) A.1 ではこれは農村集団 groupements ruraux とよばれている。
2) A. 1. p.
3) A. 1. p. 62
4) A. 1. p. 63 脚註
5) A. 1. p. 64
6) A. 1. p. 64
4) ibid., p. 65
8) ibid., p.
9) ibid., p. 65
10) ibid., p. 71
11) ibid.,
12) ibid.,
13) ibid., p. 72
14) ibid., p. 72
15) ibid.,
16) ibid.,
17) ibid.,
18) ibid., p. 74
19) B. 2. p. 120
20) A. 1. p.75
21) B. 2. p. 120
22) ibid.,
23) B. 2. p. 121
24) B. 2. p. 121
25) A. 1. p. 76
26) A. 1. p. 121
27) A. 1. p. 122
28) A. 1. p. 285
29) A. 1. p. 404
30) A. 1. p. 286
31) A. 1. p. 287

32) A. 1. p. 288
33) A. 1. p. 289
34) A. 1. p. 290
35) A. 1. p. 383—384
36) p. 384
37) A. 1. p. 384
38) A. 1. p. 385—386
39) A. 1. p. 400
40) ibid.,
41) A. 1. p. 405—406
42) A. 1. p. 407
43) A. 1. p. 415
44) A. 1. p. 420
45) A. 1. p. 421
46) A. 1. p. 422
47) A. 1. p. 426
48) A. 1. p. 444
50) A. 1. p. 445

Ⅳ

最後に Halbwachs の中産階級に関する所説についてふれておかなければならない。レイモン・アロン R.Aronはフランスは中産階級の国であるといわれたとのべている[1]。が，戦前中小商工業者など独立の自営業者が多く，かつまた金利生活者的企業主や農民が多かった時代にはそうした表現が妥当したかもしれない。しかし，19世紀末から産業化が他の国に比べて歩みはおそくとも漸次進展していったフランスにおいては新しい中産階級ホワイト・カラーも頭をもちあげてきていた。

Halbwachs はこうしたホワイトカラーを中心にしてフランスの中産階級を論じているのである。彼によると中産階級は経済学者フランソワ・シミアン François Simiand の定義にしたがって，「中程度の所得と財産をもつ人々の永続的群で上流の階級と労働者階級との中間にあたる存在で，一般に都市住民をさすのである。この中は上級手工業者，中小商工業者，自由業者，中級官公吏などが含まれる[2]」ことになる。そこには農民は含まれていないのである。こうした中産階級は歴史を考察するときあらゆる時代，あらゆる文明において存在してきたものである[3]のだが，問題は20世紀前半1930—39頃における中産階級が当面の考察の対象となる。Halbwachs は現在の時点において中産階級として分類さるべきで社会層として次のようなものをあげている。(1) 手工業者 artisans [4]—これは自己の計算において働く独立の経済主体であるが，彼等は企業の指導運営も行うばかりでなく商業的機能を合わせて営むのである。(2) 事務職員 employés—広大で複雑な層をなしており，各種の職種を含んでいるのが特徴[5](3) 公官吏 fonctionnaires.—この中にも高，中，下級の三つが区別されるが，中，下級の官公吏は中産階級を構成するのである。彼等は社会的には重要な部類で，彼等の数は国家の機能の増大に比例して増加しているのである[6]。このことは多くの近代社会において見られるところである。官公吏は事務職員と同じ理由によって手工業者 artisans たちとは区別される。すなわち，彼等は仕事において余り創始権 initiative をとりえないし，厳格な規則に従うことを要求され，多くの自由をもたない。彼等はそうした点からは労働者に接近しているし，特に下級公務員の場合低い所得のため自ら労働階級に近いと感ずるものも少くない。しかし一般に彼等はその職務に対してより高い観念をもっており，また国家の代表であるという意識をもっていることもある。このため彼等は労働者と異って服装に対して特に注意をする。そのことは家計費における服装費に対する支出の比率が一般事務員よりも，労働者よりは勿論はるかに，高いことにおいて現われている[7]。Halbwachs は中産階級の中核をなすのはこの三つの部類であるが，このほかに自由職業の中低い地位にする田舎医師，衛生関係公務員，司法界などの下級代理人などもこれに含まれると見ている[8]。だから中産階級は同質的な集合というよりはむしろ異質的な集合なのである。上のブルジョワ階級に近いものから，下の労働階級に近いものまでその巾は広く，構成員個々の責任権限あるいは所得などもかなり大きい巾の間にひろがっているのである。このような異質的存在の全体を統一的に特徴付けるものは一体存在するのであろうか。Halbwachs はこれに対し肯定の回答を行うとともにその特徴はその成員の活動が技術的 technique であることであるという[9]。すなわち，それは一定数の規則について実際的，実用的な知識をもち，規則を正確に利用応用できる技法を有することを意味するのであるが技術 technique とはそれが普遍的に，非人格的に適用される一団の規則と教訓として定義されるのである。こうした technique のもつ今日的意義は、

それが社会生活の不可欠の条件となっていることにある[10]。technique が社会生活の不可欠の条件となっている点についての Halbwachs の詳しい分析は省略しなければならないが，中産階級この中でも特に事務職員や公務員のような人々の活動は正しくこの technique の応用であることに特質があるとされるのである[11]。なぜなら，技術とは本来物的対象に対して適用される知識なのであるが，彼等の活動は人間や集団を対象としてはいても，それをメカニズムや惰性という項に還元して扱う，換言すれば人間 humanité を物化されたものとして扱うからなのである[12]。事務所には窓口がある，公衆はそこでは窓口によって機械的に分類されるケース (cas) として存在する。しかも機械の発達，生活の複雑化，事件の処理の速度向上など近代社会生活においては人間をこのように humanité matérialisée としての側面から扱う必要が多くなってくる。事務職員，公務員などホワイトカラーの増大はこうした要求に応じているのである。しかもこのような technique をもつホワイトカラーは物質という無生物だけを扱う労働者とは区別されるばかりでなく，たとえ物的な面からであろうと人間関係，社会関係に対して関心をもつが故に，労働者より高い評価をうけるのである[13]。もちろん，社会生活の根底にある意味は多様で，変化するものである。規則に従わなければならぬため一部譲歩を余儀なくされることもあるが，(この場合も technique に頼る)，technique だけに止まることはできない。そこでそうした仕事はホワイト・カラーにまかせることはできないので，そうした任務を達成できる人を見出し，その養成につとめることもおこるのである[14]。そうした領域の仕事を担当するのが，高級職員である[15]。しかし，そうした職員の下において日常的作業の技術的部分を担当する人々の数は組織の拡大，複雑化に比例して増大する。ここに中産階級の存在する理由が存在するのである。この物質と人格として見られる人間の中間において，人間や集団が一部機械的でかつ物的な形で現れる中間領域で，活躍する中産階級は，歴史の発展において必ずしも創始性を発揮はしなかったが，しかしこの中産階級の精神は Tocqueville の指摘するように，人民またはブルジョワージの精神と結びつくと偉大なことをなしうるが，ただ単独では徳も偉大さももたない政府をつくるにすぎない[16]。

Halbwachs はこのように中産階級の存在の理由を technique と結びつけて説明しているのであるが，近代社会における技術の発達の著しいことを考えると，人間を対象とした technique の発展を指摘したこの中産階級論は注目に値するものがある。デュルケームの中間集団論と関連せしめて考えると特に興味ふかいものを含んでいるといえよう。またこの中産階級論はマルクス主義からの中産階級没落論が比較的大きく勢力を得ていた時代において，特異であったばかりでなく，Halbwachs のすぐれた展望を示しているものである。そればかりでくこの中産階級論は最近の理論に対しても大きな影響を与えているのである。その点は次の項において扱うことにしよう。

註 1) R, Aron, Le concept de classe (in Inventaires Ⅲ p.7—27)
2) B. 3. p. 34
3) B. 3. p. 29
4) ibid., p. 35
5) ibid., p. 36—37
6) ibid., p. 38
7) ibid., p. 40
8) ibid.,
9) ibid., p. 41
10) ibid., p. 42
11) ibid., p. 44
12) ibid., p. 44
13) ibid., p. 45
14) ibid., p. 46
15) ibid., p. 48
16) ibid., p. 51

V

以上 Halbwachs の階級に関する分析と理論の概要をみてきたが，その長所とすべき点は，階級現象が複雑なものであって，この複雑で多彩な現象を把えるのには多くの基準を組み合わせてみることが必要であることを，明かにしたことであろう。特に Halbwachs は生産という要素だけから階級をみることは不充分でって，特に心理的要素を考慮する必要のあることを強調している点は注目される。しかも社会階級を単にイデオロギーだけの問題とせず，生計費調査の資料に基いて経験的研究の問題としてその研究を発展させたことの意義は大きい。それはデュルケーム学派の発展と

いう立場からだけでなく，階級についての社会学的研究の上からも大きい先駆的意義をもっており，その透徹した分析は極めて教訓的である。特にその労働者階級についての研究はもっとも興味あるもので，要求についての社会学的理論の試みは今日の社会心理的研究の見地から見ても重要な意義をもっているといえる。今から50年近く前の研究としてみれば，非常に鋭い分析が行われていたことを認めなければならない。ただ今日の労働者階級の問題を考察する場合，気掛りになる点は Halbwachs が労働者の生活を「物質を取り扱い処理する」のに手がいっぱいで社会との接触からさえ分離されているという点についての指摘である。この指摘は彼の労働者階級の生活水準の説明原理の中核となっているところであるが，それは20世紀はじめ頃の産業技術の発展段階，とくにフランスのそれを反映していたのではないかと考えられる。産業技術の発達するにつれて物質との接触は，それほど直接的ではなくなっている。Halbwachs は労働者の技能，知識の向上によっても事態の本質は変らないとのべているが，高度に工業技術の発達した社会においては労働者のおかれている条件は著しく変ってきている[1] とくに労働者の仕事が肉体的な作業から監視的作業や操作的な作業に移ってくるにしたがって[2] また一般に労働時間の短縮の実現によってその労働生活はもっと異った，より社会的な面をもってきているといえるであろう。最近のフランスにおける新しい労働者階級の研究はそうした条件における労働者の態度，社会意識を問題としている。そうした労働者階級研究に対して Halbwachs の研究は大いに示唆を与えているに相違ない。少くとも基本的には Halbwachs の研究は今日の研究の基礎となっているといえる。この意味において Halbwachs の研究は重視されるべきである。また彼の中産階級研究も最近フランスのホワイト・カラー研究で注目すべき説「中産階級は階級意識のない階級といわれそれは正当であるが，それはまた階級意識のない社会の前兆であることを意味するのではないか」を唱えたクロジェ Crozier にも大きい影響を与えている。M. Crozier が1965年に著わした「ホワイト・カラーの世界」Le monde des employés da bureau において Halbwachs の研究の前駆的意義が強調されているが，この面における Halbwachs の功績に対して正しい評価が与えられなければならない。

附記　〔なおはじめ本稿では Halbwachs の階級研究と最近の階級研究の関連，階級理論の発展についてもふれる予定であったが，予定の紙数を越えたので，それについては更めて別の機会に論述することにした。〕

註 1) B. 2. p. 122
2) そうした点について S, Mallet, La nouvelle classe ouvrière などが注目される。

参考書

M, Crozier, Le monde des employés de bureau 1965
G. Gurvitch, Etudes sur les classes sociales 1967
Léon Hamon, Les nouveaux comportements politiques de la classe ouvrière. 1962
Dépolitisation. (édit. par M. David) 1962
A. Touraine, La sociologie de l'action 1965
〃　La conscience ouvrière 1966
S. Mallet, La nouvelle classe ouvrière. 1963